

Title	「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開
Sub Title	Über die Entwicklung der späteren Gedanken von E. Husserl, den Begriff "Lebenswelt" als das zentrale Thema betrachtend
Author	山本, 万二郎(Yamamoto, Manjiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1959
Jtitle	哲學 No.37 (1959. 12) ,p.57- 80
JaLC DOI	
Abstract	Vorrede I) Es gibt verschiedene Meinungen über die Klassifikation der Gedanken von Husserl. Aber ich denke die Klassifikation des Herausgebers von Husserliana Bd. I recht, die von dem Standpunkte der Entwicklungsstufe versucht wurde, d.h. seinee phänomenologische Epoche ist in die drei Stufen geteilt, erstens "Ideen" (1913), zweitens "Meditations Cartesiennes" (1931), drittens "Krisis" (1936). Nach dem Herausgeber von Husserliana Bd. II, müssen wir den Anfang der Gedanken der "Ideen" bis zu 1907 zurückschieben. Ich bin mit ihm derselben Meinung. Von dem Gesichtspunkte der Entwicklungsstufe, gehören, ich meine, "Erste Philosophie" und "F.u.t. Logik" zu der Übergangsstufe in die "C.M.", und andererseits gehört "Erfahrung und Urteil" mit "Krisis" zu derselben Stufe. Das Merkmal der ersten Stufe ist das reine Bewusstsein, das der zweiten ist die Intersubjektivität, das der dritten ist die Lebenswelt. II) Über die spätere Epoche gibt es auch zwei verschiedene Meinungen, d.h. die eine meinen nach "C.M." und die andere nach "Krisis". Gewöhnlich bedeutet der spätere Gedanke die dritte Stufe. Die Lebenswelt ist zwar erst in der dritten Stufe thematisiert, aber wir können den Anfang jenes Begriffs schon 1924 finden, und wir müssen anerkennen, dass jener Begriff implizit auch der "C.M." grundlegend ist. Also die spätere Epoche in dem weiteren Sinne bedeutet die Zeit nach 1924. D.h. die Zeit um 1924 ist der Anfang der späteren Epoche, die Zeit um 1930 ist der mittlere Wendepunkt, die Zeit um 1936 ist die späteste und reife Stufe. (unvollendet) Bericht: Meiner Besuch bei den Husserl-Archiven (Lowen, Sorbonne, Freiburg, Köln), hauptsächlich in Lowen, 1958.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000037-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「生命界」概念を中心とする

フッサール後期思想の展開

山 本 万 二 郎

序 論

一 フッサール思想発展の段階

フッサールの思想発展については、フィンクはフッサールの大学時代を規準として、ハレ大学時代（一九〇〇年迄）、ゲッチンゲン大学時代（一九一六年迄）、フライブルヒ大学時代（一九一六年以後）と区分し、^{註1}イレマンは思想内容を規準として、純粹数学時代（一八八七年以前）、前現象学時代（一九一三年迄）、現象学時代（一九一三年以後）と区分している。^{註2}この両者は多少年代の喰違いはあるが、大体一致して三段階の思想発展を示しているものと言つてよいであらう。更にファーバーは、必ずしも厳密に年代順ではないが、思想発展として七つの段階に細分

「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開

している。^{註3}即ち(一)数学時代 学位論文「変分法への寄与」(Beiträge zur Variationsrechnung)(二)心理主義時代「数の概念について」(Über den Begriff der Zahl, 1887)「算術の哲学」(Philosophie der Arithmetik, 1891)「基本的論理学の心理学的研究」(Psychologische Studien zur elementaren Logik, 1894) (三)形式的論理学と記述的心理学としての現象学時代「推理計算と内容論理学」(Der Folgerungscalcül und Inhaltslogik, 1891)「一八九四年以後の論理学についてのドイツ文献に関する報告」(Bericht über deutsche Schriften zur Logik aus dem Jahre 1894)「論理研究」第一版(Logische Untersuchungen, 1. Aufl. 1900 - 1901) (四)前先験的現象学時代「一八九五年から一八九九年に至る論理学についてのドイツ文献に関する報告」(Bericht über deutsche Schriften zur Logik in den Jahren 1895-1899)「内在的時間意識の現象学についての講義」(Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, 1928)(但し一九〇五年—一九一〇年に書かれたもの)「厳密学としての哲学」(Philosophie als strenge Wissenschaft, 1911) (五)先験的現象学時代「論理研究」第二版(一九一三年)「純粹現象学と現象学的哲学考案」(Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 1913)その英訳書への序文「後記」(Nachwort zu meinen "Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie", 1931)^{註5} エンサイクロペディア・ブリタニカの現象学の項(一九二九年)「デカルト的冥想録」(Méditations Cartésiennes, 1931) (六)形式的論理学と先験的現象学の綜合時代「形式的論理学と先験的論理学」(Formale und transzendente Logik, 1929)「経験と判断」(Erfahrung und Urteil, 1939) (七)現象学と歴史時代「ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学」(Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, 1936)である。^{註6}

フアーバーの分類は、イレマンの分類に於ける前現象学時代と現象学時代とをそれぞれ三分したものと見ることが出来る。

以上はフッセリアーナ出版以前に行われた分類であつて、その出版後は多少の変更が齎らされるであらう。先づ前現象学的時代の分類については、フアーバーの分類は大体当を得たものと解されるが、フッセリアーナ第二巻「現象学試論」(Die Idee der Phänomenologies, 1907)は、^{註7}その編者の序文によれば、フッサールの思想発展史上重要な意味を有するものであつて、そこに於て始めて現象学的還元用語が用いられ、通例一九一三年の「考案」を以て先験的現象学の成立を説くが、実はこの一九〇七年の論文までその思想は遡るべきであるといふのである。若しこの立場をとれば、一九一一年の論文も当然それと同じ段階に属するものと考えられる。かくて一方「論理研究」第一版がいまだ純粹現象学ではないといふこと^{註8}、他方一九一三年の「考案」が純粹現象学であるといふことには何人も異論はないとしても、その間の移行については前述の様な問題となる点を含んでいるといわねばならぬ。筆者は前記フッセリアーナ第二巻の編者の見解に同意したのである。

次に一九一三年以後の分類についても、必ずしも諸家の意見は一致していない。先づフッセリアーナ全集に於て出版された遺稿を、どこに位置づけるべきかが問題である。

フッセリアーナ第三巻が「考案」の第一巻であるから、フッセリアーナ第四、五巻は「考案」の第二、三巻なのであるが、それは内容から言つても年代から言つても当然一九一三年の「考案」の続篇として、それと同じ段階におかれるべきであらう。しかしたとえ続編であつても、リクールの指摘する所によれば、それは「考案」の単なる続きとしての志向的分析に留まるのでなくして、更に一九〇五年以来の思想で、「考案」に於ても見られるが特に一

九三一年の「デカルト的冥想録」に於て体系的に示される現象学的方法としての觀念論的思想に関わるものとして特異な地位を占めている。即ち志向的分析は元来方法論的觀念論であつて、それは意識に対してあるものゝ分析であるのに対し、「デカルト的冥想録」に於ては意識の中に於けるものゝ分析に転換し、こゝに方法論的觀念論から觀念論的理説が生ずるのである。而して「考案」第二巻は、後者に関わりつゝも、まだ前者の立場にあるといふのである。^{註9}従つてそれは既に後者への移行行きを示すものであらう。實際その成立事情を見るに、その原稿の大部分は一九一二年第一巻の原稿終了直後に終了したのであるが、フッサールはそれ以来一九二八年に到るまで絶えず筆を加えていたのである。^{註10}従つてフーバーの分類が、一九一三年の「考案」と「デカルト的冥想録」とを同じ段階においた事は、両者の密接な関係を示すものとして卓見であると同時に、フッセリアーナ編集全体の責任者ヴァン・ブレーダ及びその第一巻「デカルト的冥想録」の編者シュトラッサーの意見によれば、^{註11}同書は一九一三年の「考案」に対するばかりでなく、フッサールの全思想発展段階にとつて劃期的であるといふのを考慮すれば、両書を單純に同列におくことに問題を感じるのである。リクールは觀念論的思想について語っているが、それは結局相互主観性の導入によつて大きな転回をするのであつて、その概念自身は一九〇七—一九一〇年以來のものであつても、それが主題化されたのは「デカルト的冥想録」に於てであつた。而してそれは單に単独主観から相互主観への移行ということに留まらず、それが觀念論の一つの頂点であると同時に、それは却つて觀念論を越えて、現象学の根本テーゼであるところの「事実そのものへ」という目標の実現に向つて大きな一步を踏み出したと考えるべきものである。こゝに劃期性を認めるべきであらうと思ふのである。

かくて前現象学時代を除き、現象学思想発展の第一時期は一九〇七—一九一三年の線に求めるべきであらうし、

第二時期は一九三〇年頃に求めるべきであらう。そこで次の問題は、「デカルト的冥想録」と「形式的論理学と先験的論理学」及び「経験と判断」とをいかに位置づけるかである。思想内容の関聯からみてフーバーの区分は一応適当と思われるが、発展史的に見る場合には別の見解が生ずる。即ち「考案」の巻末で問題となつた構成の問題が、第二巻に於て自然生命精神の構成の問題として展開した後、精神に於ける理想的普遍性の問題として論理の構成が問題となるのは、当然の順序である。その上普遍の問題は相互主観性に關係を有するが、それが既に一九二九年の「論理学」に於て問題となつている。この様な立場を更に深め体系化したのが一九三一年の著作であると解し得るであらう。ローレは志向性概念の展開を規準としてフッサールの思想発展を後づける場合に、右の様な順序に解している。^{註12}これは年代順から見ても適切な見解であるというべきであらう。^{註13}

更に一九三一年の著作に於て到達した相互主観性に基づく普遍性と客観性に関して、更に現実的具体性を獲得しようとして、「経験と判断」に於て生命界の概念を導入し、論理をもそこに基づけ様としたのである。ドウ・ヴァーレンは真理の問題からフッサールの思想発展を見て、この様な順序に解している。^{註14}

一九二九年の「論理学」と一九三九年の「経験と判断」とは、フーバーの分類による様に、同様に論理の問題を取扱つたものであつて、ミュラーの云う様に前者は理念から事実へ、後者は事実から理念への移行を示すものである。しかしその取扱い方に於てその両者はたとえ交互的關係を有するとは云え、後者の方が一層基礎的であろう。而してそれが完遂され得るためには一九三一年の著作の思想を予想するのである。^{註15}従つて後者は一九三一年の著作以後の展開であると解すべきであらう。

しかるに「経験と判断」に於て論理の問題の地盤として導入された生命界なる基礎概念は、今や人間生活全般の

基礎として見出され、そこに現象学の更に新らたな意味を見出し、人間や歴史の解釈がその下に試みられ、思想展開の最後の段階を示したのが一九三六年にその一部が、一九五四年にフッセリアーナ第六巻としてその全部が刊行された「ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学」である。フッセリアーナ第一巻の編纂者は、この「危機」を以てフッサール思想発展の第三乃至最後の段階と解している。^{註16} 筆者はその三段階説に同意するものである。但し筆者は一九三九年の著作は、その成立事情からみて、^{註17} 又思想内容から見ても「論理学」と同じ段階ではなく、「危機」と同様に第三段階に展開すべきものと思う。^{註18}

最後にフッセリアーナ第七巻「第一哲学」第一部はどこに属すべきか。その第一部の標題は批判的理念史である。その標題のみを見れば、「危機」と共にフアーバーの第七の分類に属すべきものゝ様に思われる。しかしその年代は一九二三年から一九二四年に書かれたものであり、そこに於て第一哲学として描かれた理念は、「危機」を予想しつつも、「考案」から「デカルト的冥想録」に到る地盤の上にあると云わねばならぬ。と云うのは、「考案」は元来三部から成る予定で、第一部が現象学への一般的入門で現象学的還元と純粹意識について述べ、第二部がA分析とB科学的考察とに分たれ、前者にて特に重要な問題群の分析を、後者にて自然科学心理学精神科学と現象学との関係を論じ、第三部が哲学の理念乃至あらゆる哲学の中最初のことを考察する筈であつた。^{註19} しかるに後に変更されて始めの第二部Aが拡大されて第二部となり、そのBが第三部となつて、始めの第三部は「考案」の中に入らない事になつた。その代り始めに計画された哲学の理念に当る部分が独立して、真の哲学としての第一哲学として一九二二年—一九二三年に企てられたのが、今度刊行された「第一哲学」なのである。^{註20} しかし「第一哲学」に於て講ずる所は、第一哲学への基礎的な考察だけであつて、その体系的記述は「デカルト的想冥録」を俟たねばならない。換言すれば

「デカルト的冥想録」こそ彼が第一哲学の名の下に公刊しようとした形のものなのである。従つて同書は「論理学」^{註21}と同様、「冥想録」への過渡的意味を持つものと云う事が出来よう。

所が最近その第二部体系的部分が、現象学的還元の理説と題して出版された。その編者ボエームによれば、「考案」以後、先験的現象学へ行く途が、「我在り」から出発するものと、「世界在り」から出発するものと二つに分れた。^{註22}その第一途は「考案」のとつたデカルト的方法であるが、それは一九〇七年の「試論」、一九〇八年の「私の現象学的講義の途」及び特に一九二二—一九二三年のロンドン講義、更に一九二九年の「デカルト的冥想録」に連なる途である。^{註23}それに対し第二途は結局経験界乃至眼前に与えられた生命界からの途である。^{註24}更に第三、第四の途があるであろうが、それらは何れも所与の世界からの途である。この第二途は一九二三年の「先験的現象学への途」と云う論文に表われているが、既に一九一九—一九二〇年のフライブルヒに於ける講義「哲学入門」に於ても、更に遡つて一九一〇—一九一一年のゲッチンゲンに於ける講義「認識の理論としての論理学」に於てもとられた途である。その講義が非デカルト的な途をフッサールが発見した歴史上最初である。而してその途が「第一哲学」に於て明らかにされ、そこに於て現象学的心理学の途と名づけられたが、それは更に一九二八年のブリタニカの現象学の項に於て、又一九二九年の「論理学」に於てもとられた。^{註25}而してそれは「危機」に及ぶのである。^{註26}但しデカルト的な途をとつたと云われる「冥想録」も全くデカルト的とはいわれないし、^{註27}又逆に「第一哲学」や「危機」にもデカルト的な途が全然ないわけではない。^{註28}然しデカルト的な途以外に途はないかと問うたのは一九二三年の「先験的現象学へのデカルト的な途と普遍的現象学的心理学の途」に於てであり、^{註29}一九二〇年の「現象学的還元の二つの形態」に於て、その所説を非デカルト的な途に於ける進行の「最初の企て」と名づけている。^{註30}かくて「第一哲学」に於て

は、たとえデカルト的な途が全然ないのではないとはいへ、明らかに第二途の方が勝っているのであつて、この様にデカルト的理念を根本的に問題とした所に「第一哲学」の意味があると言つてゐる。^{註32}

これによつて「考案」以後の著作が一直線的でなく、何かデグザグの感を与えるものがある理由が解る。即ち方法が何れかに片よつたからであらう。しかしそれと同時にその二途は必ずしも厳格に一方づかず、両方法が同時に行われたということ、しかも次第に第一途から第二途への転換の行われて行つたことも明らかである。通例一九三一年の「冥想録」はデカルト的な途によると解されるが、ボエームも指摘する様に必ずしも第一途のみでなく、前述の如く寧ろそれを批判し越えようとする所にこそ、その意味を持つと言つてもよいのであつて、かゝる意味に於て「第一哲学」第二部は、それだけの意味を有すると共に、その第一部の際に述べたように、やはり第一哲学の一応の完成としての「冥想録」に対する過渡的のものと見てよいであらう。^{註33}

註1 Diemer: Edmund Husserl, 1956, S. 71, Anm. フィンクはフッサール 在任の各大学時代の著作を (1) ハレ大学時代「算術の哲学」「論理的研究」(2) ゲッティンゲン大学時代「内在的時間意識の現象学についての講義」「厳密学としての哲学」(3) フライブルヒ大学時代「形式的及び先験的論理学」「考案後記」「デカルト的冥想録」「危機」と分類している。而して第二期の特徴は、認識論としての現象学の概念に、即ち実証科学の根本概念の認識論的解明としての実証科学の哲学的改革の概念にあるとし、その解明は実証性の中に匿名として留まる所の学問を追い求める主観的生命への反省によつて行われるが、それは先づ意識分析の形相的性質の強調にあると解している。第三期の深化の特徴は、更に哲学の概念が認識論の概念を越えて、科学の哲学的反省の概念が、科学の意味創造への問題にまで徹底し、而して完成せる科学的意味形象に主観的に対応する作用生命への反省に移り、かくて現象学が実存する先験的自我の解明として解され、その解明に対しては本質分析は方法論的手段であると解する所にある。而して第二期の所説は新カント学派への反対であり、第三期の所説は新カント学派の真意を充実するものだとしてフッサールは確信していた。(Einführung zu: E. Husserl, Entwurf einer "Vorrede" zu den "Logischen Untersuchungen" hg. v. E. Fink in: Tijdschrift voor Philosophie, Bd. I/1-2, Leuven, 1939)

- 2 Illmann: Husserls Vor-Phänomenologische Philosophie, 1932, S. 70
- 3 Farber: The Foundation of Phenomenology, 1943, P. 18—22
- 4 この論文は出版されなかった。従つて年代不明であるが、それは学位論文であるから、彼の大学卒業の一八八六年のも
のと思われる。
- 5 ファーバーはこの時期に属するものとして、フッサール自身の作ではないが、その弟子フィンク作にてフッサールが
承認を与えたものといわれる一九三三年の「現在の批判の下に於ける、エドムンド・フッサールの現象学的哲学」
(Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik, Kantstudien, Bd. 38)
を挙げている。
- 6 ファーバーは更にその他遺稿にて雑誌に発表されたものを挙げている。即ち、「志向的—歴史的問題としての幾何学の
根源についての問題」(Die Frage nach dem Ursprung der Geometrie als intentional - historisches Problem,
Revue internationale de Philosophie, 1939) 及び「自然の空間性の現象学的起源についての基礎的研究」(Grund-
legende Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur, Philosophical Essays
in Memory of Edmund Husserl, 1940)
- 7 Husserliana, Bd. II, Einleitung, VII, X 「この五つの講義に於て始めてフッサールは、彼のその後の全体の思想を規
定すべきこれらの思想を明らかに言及した。彼はその講義に於て、現象学的還元並びに意識に於ける対象の構成の基
本的考えについての明瞭な叙述を与えた。」
「この原稿(先験的現象学を説く)とこの五つの講義は何れも一九〇七年に出来たのだから、フッサールは純粹現象学考
案第一部(一九一三年)にて始めて觀念論に移行したと云う主張は、訂正されるべきであらう。」
- 8 Husserl: Logische Untersuchungen, 1931, Bd. I, Vorwort XIII, Husserliana, Bd. II, Einleitung IX
「論理研究では、現象学を記述的心理学と考えている。(たとえ、そこでは認識論的興味が重要なものであったとは云
え)。しかしこの記述的心理学、但し経験的現象学として解されたその心理学は、先験的現象学から区別されねばならぬ。」
- 9 Ricoeur: Analyses et Problèmes dans „Ideen II“ de Husserl (Revue de Métaphysique et de Morale, 56°
Année, N° 4, 1951, P. 358—359, 360)
- 10 Husserliana, Bd. IV, Einleitung d. Hrsg. XV
「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開

- 11 Husserliana, Bd. I, Einleitung XI, XXIX
- 12 Lauer: *Phénoménologie de Husserl*, 1955, XV
- 13 フンケもフッサール思想発展の頂点に「デカルト的冥想録」の思想、特に「所属性」(Habitualität)の概念をいっていると思われる。
- Funke: *Transzendente Phänomenologie als erste Philosophie*, „*Studium Generale*“, 11. Jahrg, Heft 9, 10, 1958
- 14 Funke: *Archiv für Begriffsgeschichte*, Bd. 3, Gewohnheit, 1958, S. 518 ff.
- De Waelhens: *Phénoménologie et Vérité*, 1953, P. 45
- 15 De Murtalt: *L'Idée de la Phénoménologie*, 1958, P. 11, 114, 254
- ミューラールは結局生命界の分析に究極すべき事を説くのであつて、その限り「デカルト的冥想録」をも越えて「危機」に至らねばならないとするのである。しかしその分析が完遂されるためには「デカルト的冥想録」に於ける cogito-cogitatum の構造の発見を予想すべき事を説くのである。
- 16 Husserliana, Bd. I, 1950, XXIX
- 17 同書の成立については、一九二八年ランドグレーベがフッサールから先験的論理学に関する原稿を纏める様に命ぜられた事から始まる。第一回の試みは一九二〇—一九二四年まで遡つたが、主として一九一九年—一九二〇年以後のものを集めた。第二回の試みは一九三〇年、第三回の試みは一九三五年でこの場合にはフッサールは積極的に活動したがその間絶えずフッサールと連絡した。特にランドグレーベの書いた序文は、或は一九一九—一九三四年の原稿に基づき、或は「危機」「論理学」から自由に再録し、或はフッサールとの談話にも基づいた。しかしそれらはフッサールの承認を得たものである。(Erfahrung und Urteil, X)
- 18 尚フッサール思想展開について、純粹現象学時代をこの様に三段階に見ようとするものであるから、ウェルヒの様に「考案」以後変化なしとする考え方には賛成出来ない。(Philosophy and phenomenological Research, Vol. III, No. 2, 1942. The Philosophy of Edmund Husserl by P. Welch, 1941, Reviews by Spiegelberg, P. 221)
- 19 Husserliana, Bd. IV, Ideen, 2. Buch, Einleitung XIII—XIV
- 20 a. a. O. S. XVI

21	Husserliana, Bd. VII, Einleitung XXIV
22	Husserliana, Bd. VIII, Einleitung XIV
23	a. a. O. S. XXXIII
24	a. a. O. S. XXXIV—XXXV
25	a. a. O. S. XXXVI
26	a. a. O. S. XII
27	a. a. O. S. XLII
28	a. a. O. S. XXXVII, LXI
29	a. a. O. S. XXXII
30	a. a. O. S. XXXVI Anm.
31	a. a. O. S. XXXVII
32	a. a. O. S. IXL

同書に於て、出発点を一方経験界とし、他方それを現象学的心理学の途と名づけているのは、危機の第三部に於て生命界からの途と心理学からの途とを分けているに對し、その先驅的意味を有するものであらう。

33 特にそのテーマを見るに、「デカルト的冥想録」にて主題となる相互主観性が、そこで相当重要な意味を持つて來ている。これは一方経験界又は体験界の概念が「危機」の生命界からの出発に對し、大きな意味を持つと共に、やはり「デカルト的冥想録」への過渡と解してよい理由であると思われる。或はその兩者への母体をなすとも云えよう。

二、フッサールの思想発展と後期と云う時期

以上の様に現象学時代の思想発展を三段階に分つならば、後期ということとは、第三段階を示すものと解するのが通例の考え方である。確かに本論文に於て後期として重点をおくのはその時期である。しかし本論文に於ては、単に第三段階のみを後期と云おうとするのではなく、第二段階の「デカルト的冥想録」或はその時期以後を広く後期と

解し、第三段階はその中の晩年といふたいのである。所がその晩年の主題である生命界概念が既に一九二四年以来芽生え、而して「デカルト的冥想録」もそれを地盤としている限り、後期思想は一九二四年迄遡らねばならぬ。そこで一九二四年から「冥想録」の年代までを後期への過渡期或は後期の芽生えと名づけたい。而して本論文はその附近から考察を始め様とするのである。

■—元来フッサールが終生を通じて求めたものは普遍学 (mathesis universalis) であり、厳密学であり、第一哲学であるという事が出来よう。この点から云えばフッサールの思想は終生変らなかつたと云つて差支えないであろう。唯それがいかなるものとして又いかにして達し得るかについての見解の展開がその思想発展を段階づけるものであらう。^{註1}フッサールはそれをまづ数学に求め、次いで心理学に求めたが、それに満足出来ずして、心理主義を批判して、純粹論理学の考へに到達したのが一九〇〇年の「論理研究」第一巻であつた。こゝに於て一応厳密学に到達したと思つたのであるが、先に数なる理想的対象を見出し乍ら、直ちにその心理的起源を求めずにいられなかつた様に、今や見出された純粹意味としての論理的領域に対しても、一面に於てそれ自らの眞理性を信ずると共に、他面に於てその眞理性の確証を求めずにいられなかつた。しかし一度心理主義を批判して到達した以上再びそこに戻ることは出来ない。そこで考えられたのが現象学である。そこに始めて現象学なる用語が用いられたのである。それが一九〇一年「論理研究」第二巻である。しかしその現象学は未だ記述的心理学以上に出る事が出来なかつた。

これが前現象学時代の経過であるが、兎に角同書に於て心理学から区別される現象学を打ち立てようとしたこと、而してそれは一方純粹意味なるそれ自ら妥当なる対象領域と、他方それに対応する主観的な意識領域との二重の構造を持つことがこゝに確立されたことが、重要な契機であつて、これ又終生変らぬ所である。それはフッサール自

身の思想の当然赴く所でもあるが、その歴史的背景をみるならば、彼の師ブレンターノの志向性概念の批判的継承はいうまでもないが、一方ロッツェの妥当説やブレンターノの代表する独塊学派の祖ボルツァーノの命題自体説、その派に属するマルティの文法論やマイノングの対象論による対象領域の見解と、他方ブレンターノと共にベルグソン、ジェームズ、デイルタイ^{註2}による意識領域に関する見解と、この両方面からの影響を見逃すわけにはいかない。^{註3}従つて現象学は、一方意味の分析と、他方意識の分析と二つの問題をいつも含んでいるのである。而して現象学の展開は、この両者をいかに解するかにかゝつていとも云えるのである。それ故ドウ・ヴァーレンはその二方面を論理研究のアンチノミーと名づけ^{註4}、その解決が現象学の展開を示すものと解し、ミュラーは前者を現象学的記述的 (phénoménologique—descriptive) 後者を現象学的先験的 (phénoménologique—transcendentale) と名づけ^{註5}、両者の相互関係を論じている。

「論理研究」第二巻の現象学は記述的心理学であり、従つていまだ経験的立場を十分脱し得なかつたのに対し、第一巻出版以来ナトルプによつて新カント学派の立場から鋭く批判され、自己の立場について深く反省苦悩し、カントの純粹理性批判を研究し、その頃デイルタイとの文通も行われたのであるが、かくて先験的立場の思想に到達したのである。これが一九〇七年の「現象学試論」(フッサール第二巻)である。而してかゝる立場から現象学の立場を深化し、先験的現象学が厳密学として登場し、「論理研究」に於ける純粹論理学にとつて代つたのである。この理念に基づいて先験的還元としての現象学的還元を完成して、純粹意識の志向的分析を企てたのが一九一三年の「考案」である。而してこゝに純粹現象学が成立すると共に、これからの発展を二つの方向に分けて解釈することが出来る。即ちそれは「論理研究」に於て示された二つの方向である。

勿論この二つの方向は相関関係を有し、決して各独立的のものではないが、何れに重点をおいて進むかによつて途を異にすると解される。即ち一方意識の志向的分析の方向をとるものが「考案」から「冥想録」への線があつて、前者に於ける純粹意識が個人的であるのに対し、「冥想録」に於て相互主観性に到達するのであるのに対し、他方純粹意味としての対象領域の分析の方向をとるものが、「論理学」から「経験と判断」に至る線であると解される。而して両者の綜合として「危機」が頂点に位すると解される。これがフーバーの解した發展段階であらう。

しかしその二つの方向は元来不可分のものであり、前者に於ても対象領域を無視したのでもなければ、後者に於ても意識領域に無頓着であつたわけではない。両者に於て何れもその二つの領域の志向的対応関係が考慮されてゐたのである。従つて殊更に「考案」以後の發展を二つの方向に分けて考える必要はないと思われる。寧ろ先に示した様に、「考案」以後年代順に次第に思想が深められたと解すべきであらうと思う。

そこで先に第一期「考案」に於て先驗的な純粹意識に、第二期「冥想録」に於て相互主観性に、第三期「危機」に於て生命界に到達したと云つたが、更に規定すれば、第一期に於ては先驗的還元の立場に於て純粹意識を主題とし、第二期に於ては相互主観的還元の立場に於てモナドを主題とし、第三期に於ては生命界への還元によつて歴史的人間を主題としてゐると云うことが出来よう。而して「考案」に於ける個人的純粹意識に基づく自我論的 (ego-logisch) 立場から、相互主観的モナドロジー (Monadologie) の立場に移つた所に劃期的性格があるのであるが、その事は單に個人的から相互主観的への移行と云うことにつきずしてその上更に重大な意味を有している。即ちそれは純粹意識から具体的な主体としての人間の立場への移行を意味するからである。^{註7}勿論そこに於て明確に人間が中心主題となつたのではないが、そこに於ける中心主題であるモナドはやがて人間に外ならないのである。こゝに

現象学展開にとつて所謂コペルニクスの転回を見出すことが出来ると思ふのである。^{註8}而してかゝる傾向が明確になつて、それが主題となつたのが「危機」である。蓋し「危機」は本来一九三五年のヴァーン講義を母体とするものであるが、その題名「ヨーロッパ人間の危機と哲学」(Die Krisis des europäischen Menschentums und die Philosophie)が示す様に、人間の在り方が主題となつてゐる。^{註9}この様に「冥想録」と「危機」とは密接な関係にあるのである。

その上よく考察するならば、「考案」の純粹意識から、「冥想録」の相互主観的モナドへの移行は、前述のいろ／＼な意味の外にもう一つ重大な意味を有している。それは前述の様に現象学そのものゝ根本的標語である「事実そのもの」(zu den Sachen selbst)乃至具体的なるものへの移行を示すことである。而してかゝる具体化への究極が「危機」に於ける生命界の概念に外ならないのであるが、「冥想録」に於ける具体化は、却つて既に「冥想録」以前に芽生えたかゝる生命界概念の発展に裏づけられているのである。かくて第三期乃至後期思想の主題が生命界であり、しかも第二期思想であるモナドロジーが、生命界概念の発展に裏づけられているとすれば、後期思想がかゝる生命界概念の発展を主題とする限り、既にその土台の下にある第二期「冥想録」はそこに含まれると見るのが至当であらう。

生命界概念が主題化したのは、著作としては一九三六年の「危機」に於て始めてであるが、後にいう様にその芽生えは用語上一九二四年迄遡ることが出来る。而して遺稿の中にはその後主題化したものもある。従つて後期思想はその頃から次第に形を成しつゝあつたといふことが出来る。この点についてフッサール自身も、一九三六年彼の弟子インガルデン (Ingarden) 宛の手紙に於て、危機の思想は既に十年以上も前から考えていたのだと云つてゐる。^{註10}

それは丁度生命界の概念の芽生えた頃に當る。而して生命界概念が時間概念と結合して次第に深化してくるのが一

九三〇年前後であり、更にその頃芽生えた歴史性の概念が次第に具体化するの^{註11}が一九三六年頃なのである。これが後期三つの段階である。

註1 ドウ・ヴァーレンは、フッサールが絶えず厳密学を主張したが、晩年に至つて「厳密学としての哲学と云う夢はさまたれた」と書いていると云い、而してその事は「危機」に於て見る事が出来ると云う。(De Waelhens: Husserl et la Phénoménologie, Critique 1951, Vol. 55, P. 1054)

又ボエームも「第一哲学」と云う名前は一九二四年以後フッサールの著作にも原稿にも見られないで、危機関係の論文では先驗哲学と云う名前に代つていと云う。(Husserliana, Bd. VII, Einleitung XLI)しかしこれは厳密学又は第一哲学と云う意味の転換であつて、現象学の厳密学と云う性格自身を捨てたのではないであらう。

フッサールの一九三〇年十二月二十一日インガルデンに宛てた手紙に於て次の様に云つてゐる。「私は完全に仕上げられれば、あらゆる存在論(あらゆる先天的学問)及びあらゆる学問一般を—最後の基礎づけに於て包括するであろう様な普遍的な哲学としての先驗的現象学の多様な思想領域乃至普遍的問題領域の研究の着手と計画を熱心に深く研究している」と。これは結局現象学が最初に目指した厳密学の理念に外ならないであらう。この手紙は一九三一年出版の「デカルト的冥想録」の印刷以後に出た手紙である。更に前文につゞく次の文によつて、それが「危機」の企てである事が理解されるであらう。

「最初の恐らく最大の困難は、根本的無偏見性とかゝる性質を有する現象学的還元の方法にある。後者—私の古い弟子の何人にも理解されなかつた—は、今や如何なる暗黒な隅も残さず又如何なる免れも残さない所の多面的な開明を受けた。この事だけで既に大きな一つの章となる。而して次に「眼前に与えられた世界」の構成的分析の体系がつゞき、更に、發生的現象学と特に現象学的意味に於ける形而上学的な「形而上学的」問題がつゞく。それから更に先驗的主観性を以て、絶対なるものが、特殊な先驗的経験によつて直接に開示される」と。眼前に与えられた世界とは生命界の事を意味している。形而上学の問題とは、「危機」に於ても十分取扱われず、遺稿に於ても断片的に考察されているにすぎない生死眼り等の問題であると思われる。

尚一八三一年八月三十一日のインガルデン宛の手紙にも次の様な文がある。「一切を最後迄具体的に考え抜く、古い研究を新らしく生き生きとさせる、最後の纏め秩序づけることに於て体系的に豊富づける―非常に困難なテーマの時には、どの様な労苦であろう。特に哲学の普遍的な方法や問題の体系が問題となる場合には」と。(Manuskript, R. Brief von Husserl an Ingarden, 21/12/1930, 31/8/1931)

(本論文に引用せるフッサールの遺稿は、筆者が一九五八年四月以降約三ヶ月ベルギーのルーヴァンに滞留中、フッサール文庫研究所理事長ヴァン・ブレーダ教授の好意により、フッサールの遺稿を直接講読したものである。Rは遺稿の整理記号。)

又デューマーは、「厳密学の意味に於ける哲学としての現象学の再形成が必要である」、それは「現実性の存在可能に対する可能性の制約」を示すものであつて、「かゝる研究に於て現象学は、あらゆる批判的意見を否定する所の直接的本質洞見に拠るのではなく」「寧ろ学問的に謙虚に批判的に行い、自己自身に対して批判的であるのみならず、いつでも批判に對して心を開いているものである」² かくしてのみ現象学は厳密な意味での学問であり得ると云つてゐる。(Diemer: Die Phänomenologie und die Idee der Philosophie als strenge Wissenschaft, Zeitschrift für philosophische Forschung, Bd. XIII, Heft 2, 1959, S. 251, 261, 262)

又フンケは phansis と phainomenon とを相関的対立項として、前者の学が Phänseologie であり、後者の学が Phänomenologie であつて、その両面を持つものとしての第一哲学が先験的現象学であると解する。(Funke: Transzendente Phänomenologie als erste Philosophie, Stadium Generale, 1958, 11. Jahrg. Heft 9, S. 568, Heft 10, S. 640.)

2 Revista de filosofía de la Universidad de Costa Rica, Vol. I, Núm. 2, Año 1957, Dithy-Husserl, correspondencia entre Dithy y Husserl, de 29-junio, 5/6-judio de 1911. に於ける往復文書

Husserliana, Bd. II. Einleitung VIII. Ann. 「この時期(一九〇六年頃)にフッサールは、彼にとつて重大なる意味を有するデイルタイと知合になつた―残念な事にこの年の手紙は保持されていない」

Husserliana, Bd. VI. S. 267, 344, 249. そこに於て、ジェームズの fringes の思想が彼の地平の考えに關係ある事と、デイルタイの心理学及び精神科学の思想についてのべてゐる。

Diemer: E. Husserl: S. 67, 76. そこに於て、フッサールが、ヘルグソンやジェームズに影響された事をのべ、更に

「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開

生命哲学に近づいた事を示し、一九一〇年デイルタイに手紙を出し、その中で彼は、根本に於て同じである所の新しい哲学を異った側から準備していると述べている事を指摘し、更に同年フッサールがコイレ (Koyré) の手引きにてヘルグソンの思想を詳細に知った時、彼は自分は全くヘルグソン党であると自ら明らかにした事を述べている。

Alexander : Bergson, *Philosopher of Reflexion*, Research, Reviews, Larrabee, P. 420, Vol. XIX, 1959, No. 3.

Strasser : *Phenomenological Trends in European Psychology*, Research, Vol. XVII, 1957, No. 1, P. 19—20

そこに於てヘルグソン、デイルタイ及びフロイドの考えがフッサールの論理研究の根本概念と同じであることを指摘している。何れも直観について述べている。

H. Kuhn : E. Husserl, *Méditations Cartésiennes*, Besprechungen, Kantstudien, Bd. 38, 1933, S. 212

そこに於てフッサールの地平開示の方法とデイルタイの生命解釈の方法が少くともよく似ている事を指摘している。

A. Gurwitsch : *Théorie du Champ de la Conscience*, 1957, P. 14.

そこに於てジェームズの縁暈 (fringes) の考えとフッサールの地平及び還元と関係ある事を指摘している。

Farber : *The Foundation of Phenomenology*, 1943, P. 17—18, 189, 205—206.

但しこれにはファーバー自身異説を有するが、しかしフッサールは自己の思想通りのものを先駆者から受けついたのでなく、それらの暗示の下にフッサールが独自の境地を開いたのであつて、その限り影響を与えられたと解して差支えないであらう。

4 De Waelhens : *Phénoménologie et Vérité*, 1953, P. 3.

5 De Muralt : *L' Idée de Phénoménologie*, 1958, P. 9—10.

9 Natorp : *Zur Frage der logischen Methode*, Kantstudien, Bd. VI, 1901, S. 281—283.

Natorp : *Allgemeine Psychologie*, I, 1912, S. 285—287, 288—290.

前者に於て「論理研究」第一巻に関し後者に於て同第二巻及び「厳密学としての哲学」について批判している。

尚ナトルプに関しては遺稿の手紙の中に次の様なものがある。

一九〇一年八月二十二日アルブレヒト宛「ナトルプは私が純粹論理学に於て提示した目的は、その本質上カントの認識

批判の目的と相符するものと云う事を正しく認めた。実際私は新しい認識批判を求めている。しかし私は全部は所有していない。そのためにはまだ始まりであつて、重要な方向に於て進み続ける必要がある」と。

又一九〇八年七月一日アルブレヒト宛に、「勿論全然新しい理性批判の究極目的を持つた大出版が再び問題となつてゐる。その新しい理性批判に対しては、私の論理研究が既に第一の基礎を含んでゐる」と。

(*Mss. R. Brief v. Husserl an Albrecht* 22/8/1901, u. 1/7/1908).

尚フッサールは一八九四年から一九二四年ナトルプの死に至るまでいつもナトルプと文通していた。

(*Husserliana*, Bd. VII, *Einleitung* XVIII, Ann. 2)

7 *De Waelhens*: Husserl et la Phénoménologie, Critique, 1951, Vol. 55, P. 1052.

8 *Mss. R. Brief v. Husserl an Ingarden* 21/12/1930.

これまでの全哲学の現实的転回即ちコペルニクスの転換が問題となる。

9 *Mss. R. Brief v. Husserl an Ingarden* 10/7/1935.

ヴァーノン講演後その感想をインガルデンに報じたものであるが、その一節に、「前半即ち歴史的根源からの（哲学から明らかにされた所の）ヨーロッパ人間（又はヨーロッパ文化）の哲学的理念。第二部即ち十九世紀の終末以来の危機の根拠。哲学或はその枝葉としての近代特殊哲学の拒否の理由—それらの哲学や科学の爆弾が、ヨーロッパに於て理念として歴史的となつてゐる筈である所の高次の人間型に正常な能作を与える事を拒絶する理由」とある。

このヴァーノン講演は一九三五年五月であるが、同年十一月にブラークで二回講演した、それを拡大したのが「危機」の原稿であると云われる。

(*Husserliana*, Bd. VII, *Einleitung* XIII—XIV. A. Gurwitsch: *The Last Work of E. Husserl*, Research, 1956, Vol. XVI, No. 3, P. 380).

両講演が全く同じでない事は同年七月十日インガルデン宛の手紙に明らかである。然し内容から見て「危機」がヴァーノン講演と密接な関係にあり当然その母体と云つて差支えないと思われる。

10 *Mss. R. Brief v. Husserl an Ingarden*, 2/1936

「先験的歴史性としての普遍的歴史性の理念の完遂—私は既に十年以上も前からその問題の罫りを廻つてゐる。二三週

「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開

間経てば貴君は第一部を得るでしょう。更に続いて第二部はカント等にもう一度結合するでしょう。そして生命界の問題、更に現象学的還元における哲学の問題が展開するでしょう。更に第三部と第四部とは現象学と物理学・心理学生物学・精神科学との関係を論ずるでしょう」と。

更に Mss. R. Brief v. Husserl an Levi-Brühl 11/3/1935. に於て次の様に云っている。「私の未曾有の前進した生涯の著作の現在の立場に於ける私にとつて、この見透しは最大の興味である。蓋し私は我々と環境と云う相關関係を可能なる多様な「我々」に関する「先験的現象学的」問題として既に多年前から提出し、しかもその問題は究極的自我の問題に戻り関係づけられるからである」と。

11 Mss. A—V—5, II—VII, 1930

A—VI, 1929

A—V—9, 1927

それらに於て人間、環境、心、社会、生命界をテーマとし、ディルタイ、ヨルクに關係する。その他 C—17—IV—I, 1930. C—16—V, 1931 に於ても生命と時間との關係を述べている。

12 Mss. R. Brief v. Husserl an Ingarden, 26/11/1934

「私はカペルで会議のために定められた論文を書いて以来（しかしまもなく帰つたが）そこで急いで（二週間で）書かれた計画即ち我々の目的理念である哲学の起源の歴史的解釈の計画が私を考えさせた。そしてその事が、私に實際に差し迫つて来た所の、深い歴史哲学的問題に導いた。」

歴史哲学と云う題名を有する原稿が一九三六年に見出される。但し歴史の問題に触れるものとしては一九三五年及び一九三四年の原稿にも見出される。即ち Mss. M—III—5—III—4, 1936, K—III—10, 1935, B—1—15—II, 1934, A—V—13—II, 1934 である。

b—後期と云う時期についての諸家の見解を見れば、大体二つに別れている。即ち一つは「冥想録」以後を、他は「危機」を以て後期とする。即ちドウ・ヴァーレンとクラフトは生命界を以て後期の特性と見る限り「危機」を以

て後期と解するものであらう。^{註1} それに対しフンケとヴォルフガング・ミュラーは先験的現象学的觀念論を以て後期と解する限り、「冥想録」を以て後期の境界とするものと解される。^{註2} ヴァークナーは具体的主観性の思想をもつて、デューマーは歴史性及び生死眠りの概念を以て後期の特徴とみる。^{註3} 前者は「危機」に於て全く具体化するとはいえず「冥想録」に於て素地を与えられるのであり、後者も亦「冥想録」に於て既に問題視され、一九三〇年以後の遺稿に見られる問題である。従つてこれも「冥想録」以後を後期とみるものと云つていゝであらう。

ランドグレーベは生命界を以て後期の特性とする最も顯著な学者の一人であるが、彼は一九二〇年代を以て後期と解する。^{註4} 即ち彼によればフッサールはその最後の十五年と云うものは直接経験の世界としての生命界について繰り返えし述べていたが、それは生命の直接性を開示しようとするものであつて、それによつて意識と世界との二重性を明らかにしようとするのである。要するに精神の創造的行為としての生命の根源性―我々の眼前に完成せる静止した存在として現われる一切のものが生ずる根源としての精神の創造的行為―これがフッサールの最後の十年間の大きなテーマであつた。^{註5} かくて最後の十年は「客観への転向」(Wendung zum Objekt)であり生命界概念の導入を以てコペルニクスの転換であると称している。^{註6}

既に述べた様に生命界を後期の特性と解するものはそれが主題化した「危機」を以てその境界線と解するのは一応尤な事であるが、その概念の成立状況を思えば、ランドグレーベの様に二十年代まで遡るのが当然であらう。そして二十年代のその転向を彼が「客観への転向」と名づけたのは、先に第一哲学の成立と特性を見た時、そこにデカルト的な途に対して、所与からの途即ち生命界からの途の暗示されている事が明らかとなつたが、ランドグレーベは恐らくそれを念頭においてその様に云つたのであらう。何れにせよ生命界概念が広狭何れの意味をとるとしても、

後期の特性である事はフッサール研究者の多くのものが等しく認める所である。^{註7}

尚デューマーは、フッサールの思想発展に於ける二つの重要な時期として、認識論的時代と形而上学時代に分け、第一局面の代表的なものは「考案」であつて、「論理研究」がその前段階をなすものと解し、第二局面は「デカルト的冥想録」を中心とする著作群であつて、それには「論理学」と「危機」が属すると解する。そして第一局面から第二局面への移行として「経験と判断」を認め、そこに於て生命界への復帰によつて形而上学の問題への地盤が開拓されたと解するのである。^{註8}従つて彼も亦一方「冥想録」を後期の境界におくと共に、他方後期の地盤をなすものとして生命界を認めているのである。

デューマーはこれに関してフッサールの時間問題の展開を考察している。彼によれば、フッサールの時間概念は三段階の展開を示している。即ち第一時期は「内在的時間意識の現象学についての講義」であり、第二時期は一九一七年から一九一八年のベルナウの時間講義であるが、それは今まで見過されている程短い範囲のものである。しかし重要な新しい成果は一九三〇年代に始まるC原稿にある時間問題であつて、これが第三期である。そして第一時期の特徴は意識の構造であつて、そこに於て自我はまだ空虚な同一極である。これに対し第二時期の特徴は、自我は具体的統一として自ら構成するものであるが、時間は純粋な受動的結合によつてのみ構成されるのであつて、そこに於ては自我の能作は全く第二次的である。その際具体的自我と慣習性が区別される。これに対し第三時期に於ては時間が全面的に主観に移され、時間は主観の能動的作用によつて構成され、しかも歴史性をおびて来るのである。そして前期に於ける自我は受動的時間的なものに対立していたが、後期に於いて時間は全面的に自我の能作となつたと解している。即ち三〇年代を以て後期と解するのである。^{註9}彼はこれを未刊原稿に基づいて云うのであ

るが、その年代は正に「冥想録」の時期であつて、彼も亦前述の如く、これを以て劃期的と解するのである。元来同書は未刊原稿の思想に裏づけられているのであつて、そのことは生命界の概念についてと同様に、時間の概念についても云える事であらう。^{註10}

とにかく三〇年代がフッサール思想展開にとつて非常に大きな意味を持つと云う事が出来る。そしてその前後を含めて後期と云おうとするのである。

註1 De Waelhens: Husserl et la Phénoménologie, Critique, Vol. 55, 1951, P. 1052-1054

Kraft: Von Husserl zu Heidegger, 2. Aufl. 1957, S.118

2 Funke: Transzendente Phänomenologie als erste Philosophie, Stadium Generale, 11. Jahrg. Heft 9, 1958, S. 565

Funke: Zur transzendente Phänomenologie, 1957, S. 17—18

W. H. Müller: Die Philosophie Edmund Husserls, 1956, S. 20

3 Wagner: Kritische Betrachtungen zum Husserls Nachlass, Philosophische Rundschau 1953/4, 1. Jahrg. Heft 2/3, S. 105, 115

Diemer: Edmund Husserl, 1956, S. 68, 271, 278

4 Landgrebe: Phänomenologie und Metaphysik, 1947, S. 102, 108, 129

5 a. a. O. S. 16, 18, 19

6 a. a. O. S. 113

7 Husserliana, Bd. I, Einleitung XXII (Strasser)

「フッサールの哲学的生成に於ける最後の局面を正確に書き記す事はこゝでは出来ない。この時期の主要特徴として、一部は明瞭に一部は含蓄的に示されるフッサールの形而上学への信念を示す事で十分だらう。その形而上学の中心テーマを形成するものは、自我の先験的能作からの生命界の発生である」。

「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開

Biemel (Husserliana, Bd. VI, XIX)

「フッサールのこの時期の思索は、生命界の存在論の問題に絶えず集中していた。」

Biemel (Zeitschrift f. ph. Forschung, Bd. XIII, Heft 2, 1959. Die entscheidenden Phasen in Husserls Philosophie, S. 213)

「フッサールは生命界の構造の開示に留まっていなくて——寧ろ生命界そのものを可能ならしめる構成的能作に戻り間うとした。蓋しそれによつてのみ我々は先験的自我の匿名の能作に近づく事が出来る。そしてその自我は「危機」に於て同時に歴史的理性として開示するのである。」

その他ミュラーやグールヴィッチも同様である。両者の著書は既に前に示した。

Aster: Die Philosophie der Gegenwart, 1958, S. 432

彼も生命界の純粹本質論を以て後期の特色であることを指摘している。

8 Diemer: E. Husserl, S. 70-71

9 a. a. O. S. 66—68, 144—146.

10 シェトラッサーは、フッサールが晩年に於て求心的と云うよりも寧ろ遠心的になつたと云っている。これは何を意味するか明確でないが、その論旨からみて現実的なものとの関係が密接となつて来た事を意味すると思われる。従つてこれも亦「冥想録」以後「危機」を頂点とする時期を意味すると思われる。彼は「冥想録」を以つて後期の著作と解している。(Strasser, Phenomenological Trends in European Psychology, Research, Vol. XVIII, 1957, No. 1, P. 18, 22)

(未完)

○ 本稿は一九五九年度前期慶応義塾学術振興奨学研究費補助による研究の一部である。